

喜多埜きただの

恩賜の御衣

去年今夜侍清涼 去年の今夜清涼殿に侍す

秋思詩篇独断腸 「秋思」の詩篇ひとり断腸

恩賜御衣今在此 恩賜の御衣いま此処にあり

捧持毎日拝余香 捧持して毎日余香を拝す

右記の漢詩は天神さまこと、菅原道真公が生前に太宰府にて詠まれた有名な漢詩『九月十日』です。以下現代語訳です。

去年の今頃、私は清涼殿にいた。陛下から与えられた勅題「秋思」の詩を詠んだところ、その哀切な詩情の出来に陛下が感激され褒美として御衣を頂いた。その衣は「まこ」にある。あの頃を思つて、菊の香りの残るその余香を拝するのだ。

この詩の詠まれる前年の九月九日に、重陽の節句という菊の行事が行われており、その後宴(九月十日)の事を思い出されて詠まれた詩が『九月十日』のこの詩です。

一般には、「不遇を嘆く道真公」という解釈が一般的ですが、重陽の節句は長寿を祈る節句であり、この『九月十日』の前年に詠まれた『秋思』の詩を読むと、この詩が、お若い醍醐天皇の御代が長く栄えあるものでありますようにという願いが込められていたものである事がわかります。

己の不遇を嘆くのではなく、何よりも陛下の為、国の為と、祈りを捧げられる道真公の純朴な姿に、日本人の心の美しさを感じます。御恩に思いを致し、頂いたものを大切にし、大切な人进行う心。いまの日本に足りないものがこの詩にはあるのかもしれない。

中秋の明月

今月十二日は中秋の明月です。梅田・茶屋町は与謝蕪村が「月は東に 日は西に」と詠んだ月の名所でもあり、月に所縁のある地でもありました。この日には、お団子と小芋をお供えし、月を愛でて、秋の恵みに感謝しましょう。

第一室戸台風 七七年

昭和九年九月二十一日午前五時頃。四国の室戸岬に上陸した事からこの名がある第一室戸台風は、戦前の大阪に大変な被害をもたらした台風として知られています。

今年はその第一室戸台風の上陸からちょうど七十七年となります。(第二室戸台風の上陸から数えても五十年の節目にあたります)

この台風では、暴風により四天王寺の五重塔、金堂が倒壊し、高潮の為、大阪城付近にまで水が押し寄せ、多くの溺死者を出すなど甚大な被害をもたらしました。また、大阪に上陸した時がちょうど登校時間帯にあたり、被災地域全体では、二七〇二名の死者のうち、実に一割近い、二六七名もの児童・小学校関係者の方がお亡くなりになりました。同じ北区の豊崎東小学校でも、校舎の一つが倒壊し、多くの生徒さんが死傷したなど、大阪市内においても大変な被害がありました。

今でこそ、先人の方々の防災対策により、これほどの被害を受ける事は少なくなりましたが、先の東日本大震災のような、我々の想像を超えた猛威が現実起こっています。既存の防災に過信するのではなく、自然災害への備えを今一度確認しましょう。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 綱敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀 知

